

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530861

研究課題名(和文)心理リハビリテーションを活用した重度・重複障害児に対する人間関係の形成

研究課題名(英文)The program of making interpersonal relation for children with severe handicap by using psychological rehabilitation

研究代表者

香野 毅 (Kono, Takeshi)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：70324324

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、重度・重複障害児を対象とした人間関係の形成を目指した支援プログラムの開発を目的とした。動作法による相互交渉を活用した三項関係の形成と身体遊びを介した模倣・逆模倣関係の形成といった発達支援の方法について検討を行った。大人からの模倣を活用した指導の成果を検討し、他者への注視やポジティブな情動を引き出すことを明らかにした。

また保護者が重度・重複障害児に抱くニーズについて調査した。その結果、身体の動きや健康の保持は、幼少期にニーズが高く、その後人間関係の形成や社会生活体験といったニーズが高まってくることを明らかにした。また家庭療育をサポートすることの必要性和専門家の役割について検討した。

研究成果の概要(英文)：This study developed the intervention program for sever handicapped children; the program focused social skills which is in triad relation. Our intervention methods were Dousa-Hou and imitation from adults. Several changes were recognized in this study.

And second study investigated the special needs of person with physical disabilities by using questionnaire method and interview method to their parents. As the results, questionnaire showed that health, physical movement and ADL were important needs in a period of infants. With aging, human relations and social life became important needs by degrees. we concluded why their special needs are changed.

研究分野：特別支援教育

キーワード：重度・重複障害 心理リハビリテーション 模倣 人間関係の形成

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景として、以下の3点をあげることができる。

1) 近年、初期の社会性の発達に関する研究成果はめざましく、障害児の発達様相にもその研究的関心が向けられている (Dunham & Moore, 1995)。Tomaselloら (2005) は社会的認知の発達を 行動と情動の共有、 目標と知覚の共有、 意図と注意の共有の3つの段階に整理して説明を試みている。自閉症児における社会性の問題はよく知られているが (別府, 2001)、重度・重複障害児もまた、自閉症児と同様かそれ以上に、初期の社会性の発達に大きなつまずきを持っている (徳永, 2003)。重度・重複障害児は、姿勢・運動、認知、言語、コミュニケーションといったすべて領域に著しい発達の遅れが生じ、このようなひとつの領域として、あるいは領域間の発達の連鎖として社会性の発達の遅れが生じている。自閉症児を対象とした社会性発達支援プログラムはすでにいくつか提案されているが (長崎ら, 2009; Gutstein ら, 2002; 他)、重度・重複障害児については十分とはいえない (徳永, 2009)。

2) 肢体不自由特別支援学校には、多くの重度・重複障害児が在籍し (下山, 2010)、彼らへの教育的対応の質を向上させることが求められるが、教育支援方法の開発や検討が十分であるとはいえない (坂口, 2006)。平成 21 年度に新しい特別支援学校学習指導要領が公示され、自立活動であげられた内容に「人間関係の形成」があり4つの項目があげられた。このうち(1)他者のかかわりの基礎に関することと(2)他者の意図や感情の理解に関すること、については、心理学的には、社会的認知(社会性)の発達と捉えることができる。これらは、自閉症児の持つ社会性の困難さへの自立活動による指導を取り上げたと読み取ること

ができるが、重度・重複障害児への自立活動の指導の内容としても重要な視点と捉えることができる。しかし自立活動におけるその指導方法や他の5つの自立活動の内容との関連についての検討は十分とはいえない。

3) 社会性の発達を目指したときに子どもにとって最も密接な関与者(パートナー)である保護者との対人的営みをプログラムに組み込むことは重要である。日々の生活の中で繰り返し行われる生活機会利用型の指導は、社会性の発達には欠かせない (L. Koegel ら, 2009)。これまでの教師をはじめとした対人援助専門職は、主には子どもに直接的に関わって療育の効果をあげることに従事してきた。その意義は認めつつも、生活支援という視点を盛り込むならば、保護者と子どもの日常的な関わりを支えていく役割も重要である。また子どもの日常的な生活実態の把握を抜きに学校等での指導を計画することはできないように、家庭と学校の関係は相補的である。学校と家庭の協働は子どもの発達支援を目指すプログラムにおいて重要な視点である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、重度・重複障害児を対象とした「人間関係の形成」を目指した支援プログラムの開発である。このプログラムは、「人間関係の形成」の主たる要素である社会性の初期発達を中心領域とする。また重度・重複障害児にとって重要な生活の場である特別支援学校と家庭のふたつの場において、教師と保護者によって協同的かつ包括的に実施されるところに特徴がある。具体的には、動作法よる身体運動的相互交渉を活用した三項関係の形成と身体遊びを介した模倣・逆模倣関係の形成といった社会的認知を育む発達支援の方法について開発・検討を行う。

3. 研究の方法

本研究は以下の研究から成り立っている。

研究1. 重度・重複障害児に対する社会性の初期発達支援を目指した動作法と模倣を活用したアプローチによる事例研究

研究2. 特別支援学校での「人間関係の形成」を目指した自立活動の指導についての授業に参加しながらのアクションリサーチ研究

研究3. 重度・重複障害児への「人間関係の形成」を目指した家庭での保護者のかかわりとその効果についての事例研究

研究4. 重度・重複障害児をもつ保護者の家庭での療育等に関するニーズ調査研究

4. 研究成果

研究1については、以下の成果が得られた。

本研究では、重度・重複障害児において大人からの模倣が社会コミュニケーション行動にどのような効果をもたらすのか検証する。

【方法】 協力児：Y児(6歳)水頭症。KIDS検査では運動0:7、操作0:9、理解1:8、表出1:0、対子ども1:2、対成人1:0。いくつかの音声で意思を表出し、実験時期には「ないない」という言葉を多用していた。運動は、側臥位やうつ伏せ姿勢。両手支持で短時間座位可。手首や肘に緊張があり、突っ張る。物や人に自発的に手を伸ばし、掴みやすい物を手指に引っ掛けて持つ。対人的には自発的で意欲的に関わる。共同注意チェックリストでは、要求の指さし(手差し)交互凝視、手渡しなどに○がつけられたが、叙述の指さしやふり遊びはまだみられなかった。

実験者：協力児と面識のある学生1名

手続き：実験は以下の流れで行った。2つの条件の実験をそれぞれ2回ずつ行った。

1) 無反応2分(積極的に関わらない)(以下、SF前)

2) <模倣条件>大人からの模倣3分 協

力児の遊びや行為を可能な限り実験者が真似をする

<随伴条件>大人からの随伴的関わり

3分 協力児遊びや行為に声かけや玩具の提示などを行う(模倣はしない)

3) 無反応2分(積極的に関わらない)(以下、SF後)

環境設定：協力児はセラピーマットで側臥位。眼前の手の届く範囲に、風船、マラカス、スイッチで動く犬のぬいぐるみ、タンバリンなどの6種類の玩具をそれぞれ2つずつ置いた。実験者と協力児がこれらを挟んで正対する位置関係。協力児の様子はVTR記録された。

分析：以下の3つの観点をVTRからデータ化した。

注視時間(おもちゃ・実験者・その他の3つに分類)

(1分あたりの秒数に換算)

自発的な活動の変化の回数(他のおもちゃを手取る、実験者に差し出すなどの活動の変化)

ポジティブな表情を示した回数

【結果】 図1~3に結果を示す。注視時間と自発的な活動は、大人からの模倣をおこなっているときに増加傾向が認められた。ポジティブな表情は、大人からの模倣に対し多く表出され、SF後においても持続していた。

【考察】 2点について考察する。ひとつは随伴条件がなぜ注視などの行動を喚起しなかったのかについてである。随伴行動は、大人側が子どもの行為意図を読み取り、ほぼ同時に(実際にはわずかに遅れて)ある言動を行うものである。このとき子どもには、自分自身の行動と大人が行っている行動を関連付け、さらには大人側の行為に含められた意図を読むことが求められる。また自分が行っている活動からいくらかの注意資源を分配しなくてはならない。14カ

月の定型発達児では大人の随伴行動によってコミュニケーションな行動が喚起されると報告されているが、社会性の発達に遅れのある子どもの場合、必ずしも随伴的関わりが社会コミュニケーション行動を引き出すわけではない。

もうひとつは模倣条件が注視、自発的活動、ポジティブ表情のいずれも引き出していた理由である。これは他者意図の理解が「自分と同じ」という意味ではるかに容易であることによるだろう。自分と同じ行為を行う大人に「意図のある他者」を発見し、その意図の内容まで理解が可能となる。自分の意図を重ねるだけで良い。さらには自分の行為を他者がなぞってくれることで、意図の共有までも体験可能となる。また実藤・大神(2008)が指摘するよう、大人からの模倣は、大人側にも子ども理解の手がかりを提供している。その点も大きく作用しているものと考えられる。

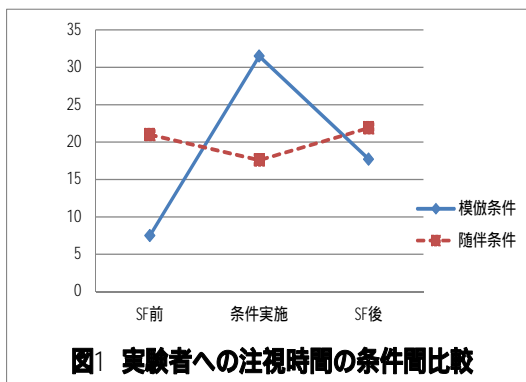


図1 実験者への注視時間の条件間比較

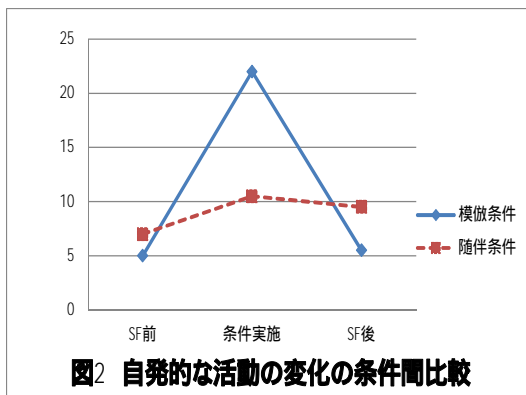


図2 自発的な活動の変化の条件間比較

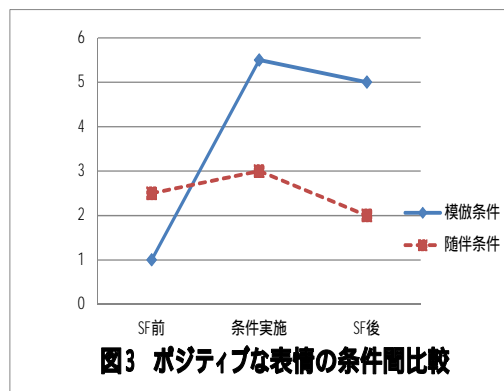


図3 ポジティブな表情の条件間比較

研究2については、この研究期間内に30校を超える特別支援学校において、指導助言およびコンサルテーションを行った。その成果は、各学校の教育研究に反映されることとなった。

研究3については、動作法を用いて家庭療育を実施している家庭に対して質問紙調査を実施した。この調査の目的は、保護者が家庭で行っている動作法の取り組み実態について明らかにすることであった。保護者の多くは、週に5日ぐらい、夕食後や就寝前に、母親が15分程度、緊張をゆるめることをねらいとして、リラクゼーション課題を中心に親子訓練に取り組んでいた。これは心理リハビリテーション（動作法）が当初から保護者指導や研修をプログラムに組み込んできた成果と考えた。これらの結果から、トレーナーSVには家庭での取り組みを支えるために、ふたつの役割が求められていると考察した。ひとつは課題や技法を保護者に伝達する教える役割であり、もうひとつは家庭での実施状況などを考慮した上で、家庭での課題を提案する役割である。

研究4について、重度・重複障害児をもつ保護者の家庭での療育等に関するニーズ調査研究のために、肢体不自由者の成長や育ちのニーズについて保護者を対象に調査を行った。高校生もしくは成人の肢体不自由

由者をもつ保護者 55 名に質問紙調査を行った。幼児期から現在に至るまでどのようなニーズを持ってきたか自立活動の区分に則して回答を求めた。さらに 4 名の成人肢体不自由者の保護者に聞き取り調査を行い、ニーズの詳細や当時のエピソードについて尋ねた。カイ二乗検定と下位検定を行った質問紙調査の結果としては、早い年齢段階には<健康の保持><身体の動き><生活行為>のニーズが高く、その<人間関係の形成><社会生活体験>は遅い年齢段階でニーズが高まっていた。聞き取り調査では、各ニーズの選択理由やニーズ内容の質的な変化、環境や発達の変化などを契機にニーズが変化することが語られた。各ニーズの年齢段階による変化について考察を行った。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

「発達障害のある子どもの姿勢と動き」
教育と医学 2015 年 3 月 No.741
pp.58-64 香野 毅

「緊張が高い子どもへの理解とアプローチ」
発達教育 2014 年 5 月 Vol.33 No.5
pp.4-11 香野 毅

「家庭での動作法への取り組みの実態とトレーナーやスーパーバイザーの役割について」
リハビリテーション心理学研究 2012 年 10 月 第 39 巻 1 号 pp.69-75
座光寺卓・香野 毅

〔学会発表〕(計 2 件)

「重度・重複障害児の社会コミュニケーション行動に及ぼす大人からの模倣の効果について」
日本特殊教育学会第 52 回大会 2014 年 9 月 香野 毅

「肢体不自由者の保護者におけるニーズの特徴とその変遷 保護者への質問紙および聞き取り調査から」
日本特殊教育学会第 50 回大会 2012 年 9 月 香野

毅

〔図書〕(計 1 件)

「第 13 章 肢体不自由の理解と支援」
2015 年 1 月 『インクルーシブ教育時代の
教員をめざすための特別支援教育入門』
大塚玲編著 萌文書林 184-197 香野
毅

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
香野 毅 (TAKESHI, Kono)
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号：70324324

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：